

# 工場内における日本語使用状況調査 -否定の使用状況-

袴田麻里（静岡大学留学生センター）

## 1. はじめに

厚生労働省（2003）が発表した外国人雇用状況報告によると、外国人労働者を雇用している事業所数は対前年度比 7.9%、外国人労働者数は同 20.2%増加している。産業分類別では、事業所数、外国人労働者数ともに「製造業」が最も多く、これに「サービス業」、「卸売・小売業、飲食店」を合わせた上位3分類で、全体の8-9割を占めていると報告している。

このように、日本国内で就労する外国人は年々増加し労働力として定着しつつある。これら外国人労働者に対する日本語教育は、多様化する日本語教育の一つとして、今後ますます重要性を増すと考えられる。しかし、従来の進学希望者対象の場合とは異なる要素が多く、また、具体的にどの技能・項目を、どのぐらいのレベルまで学習する必要があるのかという点が明瞭でないため、学ぶ側も教える側も試行錯誤しつつ学習を進めているのが現状ではないだろうか。

このような事柄を明らかにするためには、外国人労働者が日常的に接する日本語母語話者の日本語使用状況を調査する必要がある。限られた分野、または空間における、日本語母語話者の実際の日本語使用状況調査は、技術研修、ビジネス、大学での専門教育などを目的として行なわれてきている。その多くは語彙調査で、抽出された語をシラバスに組み込むことによって指導効率を上げることが期待されている。しかし、語彙は多量であり、その種類も多いことから、応用性が乏しい恐れがある。

専門や使用環境が異なっても、ある程度の応用が可能で学習者に有益なのは、文型や活用形、文章構造の使用実態ではないかと思われる。これまでに、大学における専門日本語教育の基礎的研究として、文型や文体、文末表現の分析が行われてきている（佐藤・他（1997）、杉田（1997）、村岡（2001）、村田（2003、2004）、畷田谷（2003））。

しかしながら、発話の分析は少なく、また外国人労働者の周囲で使用される日本語を対象とした調査はほとんど行われてない。そこで、ケーススタディとして、外国人労働者の多い工場（製造業）において、日本語母語話者が実際に日本語、特に日本語教育において入門期から必ず導入される否定形を、どのように使用しているかを調査した<sup>(1)</sup>。

## 2. 調査の概要

### 2. 1. 調査方法

外国人作業者のいる製造組立ラインの日本語母語話者ラインリーダー（以下リーダー）12人に普段の就業状態のまま、携帯録音機を持ち歩いてもらうことを依頼し、各リーダー1時間程度の作業中の発話を録音した（60分テープ使用）。リーダーが作業者に話しかけるのは、作業指導、不良品発生時が多いため、機種変更などによって、作業指導が集中する月初めに録音を依頼した。

本調査は、(1) 録音資料を JCHAT 形式<sup>(2)</sup>で文字化し、「WAKACHI98-分ち書きガイドライン（大嶋・他（1998））」に従って語に分割する。(2) 「CHILDES MANUAL FOR JAPANESE（大嶋・他（1998））」に従い、文字化資料に品詞と形態素のコードを付ける。(3) リーダーが作業者と話している部分だけを抽出し、さらに雑談など業務に直接関係のない発話を除く。(4) 言語分析ソフト CLAN<sup>(3)</sup>の freq 機能<sup>(4)</sup>で「ない」と形態素コード「NEG」をキーワードに使用頻度を算出する、(5) 否定の意味を持たない「ない」と「NEG」を除く、の手順で分析資料を作成した。

分析資料には「ない」または「NEG」を含む語形がいくつかあるが、本調査では、以下のように分類することとする。

① 「ナイ形」グループ=語形に「ない」または「ない」の活用形があるもの。

例：分からない。（「分かる」の否定（NEG）の非過去）  
 なかった時、ー。（「ある」の否定（NEG）の過去）

②「ナイ異形」グループ＝「ない」が撥音便化、母音連続による音変化を起こしているもの。

例：ねえよ。（「ある」の否定（NEG）の異形の非過去）  
 分からなかったら、ー。（「分かる」の否定（NEG）の異形の仮定）

③「その他の形」グループ＝①、②ではないが「ない」または「NEG」を含んでいるもの。

例：分かりません。（「分かる」の丁寧の否定（NEG）の非過去）  
 流すな。（「流す」の否定（NEG）の命令）

## 2. 2. 被験者について

被験者は、静岡県内の輸送機器製造企業に勤務するリーダー12人である（表1）。全員男性で、勤務歴は2年から13年である。英語、その他の外国語の能力は極めて低い。リーダーの業務は、作業員への作業指導、作業補助（準備を含む）、安全確保、品質チェック、不良品修正など多岐に渡る。この工場は流れ作業による組み立てが中心であり、日本人作業員に混じって外国人研修生や日系ブラジル人・ペルー人が日常的に組み立てラインで作業に従事している。

<表1> 被験者について

被験者	勤務年数	ライン	被験者	勤務年数	ライン
A	5	エンジン組立	G	13	エンジン組立
B	7	車体組立	H	6	車体組立
C	4	車体組立	J	10	車体組立
D	2	エンジン組立	K	8	車体組立
E	5	エンジン組立	L	4	車体組立
F	4	車体組立	M	6	エンジン組立

## 3. 結果と考察

### 3. 1. 「ない」または「NEG」の使用頻度

<表2>は、リーダーの発話における「ない」または「NEG」の使用頻度を示したものである。語形としては①（ナイ形）と②（ナイ異形）がほとんどであった。普段の就業状態での録音であるため、口語でよく使用されるナイ異形の使用が多いだろうと予想されたが、今回の資料では特に多く出現していなかった。

これは、作業指導や不良についての説明は重要であるため、全くの口語を使わないで改まったニュアンスを出しているのだと考えられる。また、このような事柄は相手が理解しなければ意味をなさない。そのため、理解を重視し丁寧に話しているためだとも考えられる。

<表2> リーダーの発話における使用頻度

	①（ナイ形）	②（ナイ異形）	③（その他の形）	合計
使用回数	81	33	3	117

### 3. 2. 「ない」または「NEG」が使用された箇所

<表3>は、リーダー12人の発話において「ない」または「NEG」が否定の意味を持って出現した箇所とその使用頻度を示したものである。「ない」または「NEG」は、主節・従属節<sup>⑤</sup>内、名詞修飾部内などで述語として使われている。主節での使用のうち24回は疑問文での使用であった。「その他」には、引用された句内と「ーように」の前での使用がそれぞれ4回、「ーで（も）」の前での使用が2回であった。以上より、「ない」または「NEG」が出現した箇所はさまざまであるが、使用数から主に主節・従属節の述部で使用されていることが分かる。

<表3> 「ない」または「NEG」が出現した箇所とその使用頻度

出現した箇所	主節	従属節	名詞句	その他	合計
使用頻度	67	31	9	10	117

### 3. 3. 否定の対象となった品詞

<表4>は、否定の対象となった品詞と、その出現頻度を示したものである。語形に関係なく、動詞の否定が圧倒的に多いことが分かる。名詞には、形式名詞、指示詞を含む。今回の資料では、形容詞の否定は全く観察されなかった。村上(2001)、畝田谷(2003)は主節を対象として分析し、述部では動詞の使用が多いと報告している。述部以外でも使用される名詞・形容詞より、動詞が否定の対象となる割合が高いのは、動詞が述部で使用される割合が高いためだと言える。

<表4> 否定の対象となった品詞

	①	②	③	合計
動詞述語	76	33	3	112
名詞述語	5	0	0	5
形容詞述語	0	0	0	0
合計	81	33	3	117

<表5>は、ナイ(形態素NEG)と組み合わせられる形態素とその使用頻度である。動詞、または名詞に否定の形態素NEGを付加しただけの形「ナイ(NEG+φ)」が最も多く使用されており98回(84%)であった。次に多かったのはNEGに過去を表す形態素を付加した「タ:ナクッタ(NEG+PAST)」で7回、「タ以外(NEG+PAST以外)」は12回(「ナク」が6回、「ナクッタ」と「ナイデ」が各3回)であった。

工場内では、現状の説明・確認以外に、今後の避けるべき事態についても説明される。リーダーはそれらを回避するために、作業指導で、正常ではない状態や通常とは異なる事態(以下、正/通常とは異なる状/事態)とその対処法について説明する。「ナイ(NEG+φ)」の使用が多かったのは、今後の避けるべき事態を想定して、正常、または通常の状態を否定し、強調するためだと考えられる。工場では、業務上、それらの事態の発生を極力抑える努力をしているため、発生したことを意味する「タ(NEG+PAST)」の使用が少なかったのだと思われる。また、それらの事態が発生してからの確認は現状確認となるため、「タ(NEG+PAST)」ではなく「ある」の否定、またはなされているはずの状態の否定として、補助動詞「テイル」を否定する形が観察されたのだと推測される。

<表5> ナイ(NEG)との組み合わせ

	ナイ (NEG+φ)			タ (NEG+PAST)			タ以外 (NEG+PAST以外)			合計	
	①	②	③	①	②	③	①	②	③		
動詞	動詞のみ	53	25	1	2	2	0	4	6	0	93
	動詞+補助動詞	11	0	0	2	0	0	1	0	0	14
	動詞の可能形	2	0	2	0	0	0	1	0	0	5
名詞		4	0	0	1	0	0	0	0	0	5
グループ別合計		70	25	3	5	2	0	6	6	0	117
組み合わせ形態素別合計		98			7			12			

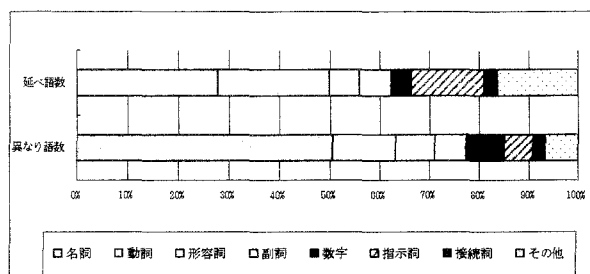
動詞の異なり語数は42語で、その中では、特に「ある」の否定「ない」が頻用された(31.3%)。次に使用が多いのは「分かる(9.8%)」「入る(6.3%)」だが、「ある」との頻度差は歴然としている。組み立てラインでの作業は基本的に部品の組み付けである。作業が円滑に行われるために、リーダーは各部品を準備する。先に、不良品を出さないことが業務において重要な課題であると述べたが、その基本は部品が

組付けられるべき位置にあるかないか、またその部品が必要な個数あるかないかということである。事柄としては単純だが重要であるため、「ある」の否定「ない」が多用されたのだと推測される。

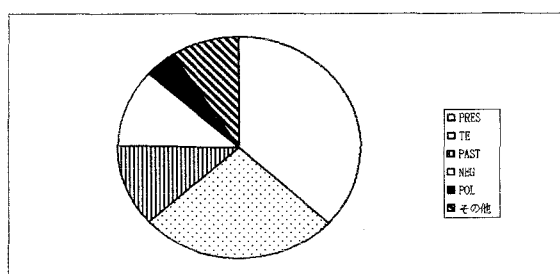
### 3. 4. 発話全体における否定

全体の使用語数<図1>を見ると、リーダーの発話全体(延べ語数)において、名詞が占める割合は指示詞を含めて約5割、動詞は2割とかなり差がある。しかし、<表4>で示したように、名詞のほとんどは否定の対象となっていない。名詞は述部以外でも使用されることを考慮しても少ないと言わざるを得ない。つまり、否定は動詞に偏った現象だと言える。一方、動詞全体からみると、否定(NEG)は11.5%であり、出現が少ないことが分かる<図2>。つまり、品詞を特定しなくても、否定(NEG)の使用は少ない。農学系論文主節においても、否定形が動詞述語類の活用形に占める割合は8.8%に過ぎない(村岡(2001))。否定(NEG)は、使用する環境や目的が異なっても使用頻度が低い可能性がある。

<図1> リーダーの発話における自立語の割合



<図2> リーダーの発話(動詞)における形態素出現回数



このような現象が生じたのは、否定が通常とは異なることを表現するために用いられることが多いためではないだろうか。今回の資料を見ると、否定(NEG)は、注意喚起<1>、正/通常とは異なる状/事態の確認<2>、正/通常とは異なる状/事態の対応<3>、正/通常とは異なる状/事態の連絡<4>、正/通常とは異なる状/事態発生による強い禁止<5>の意味を持つ発話で使用されている。特に正/通常とは異なる状/事態と関係がない発話例<6>は少ない。

- <1> L (リーダー) : こっち側、今さ、当たるつつの、昨日出たもんで。(作業を見せながら) こうやってやると。だもんで、こっちの隙間ないだよ、こっちに比べて。ここの隙間がないもんで、こうなってるだよ。分かるら。だもんで、あそこんとこ、注意して。
- <2> L : (不良を見つけて) どうしたの、ここ? どうした? やってなかった?  
 U (リーダー以外) : ちょっと外れてたもんで。  
 L : 時間かかりそう?
- <3> L : (作業者の作業を見ながら) そうそうそう、今、今の要領で。あんまり入らなかつたらさ、あの一、いっぺん締め付けてツメ合わせるって方法もあるけど。  
 U : はい。
- <4> L : (放送) えー、クリーナーのビニールの噛み込みが、えー、多発しています。こちらでは対処できませんので、至急確認をお願いします。
- <5> U : こっち。〇〇のほういい? (エンジンの両側に付ける部品の確認) あ、だめ。  
 L : 流すな、馬鹿野郎。
- <6> L : (作業者Aは) 段取りが分かんない。見りゃあ分かると思う。三GDは全然分かんないけど。  
 U : QLは?  
 L : QLはもう分かっているとします。

工場でのライン作業では、不良品を出さないこと、所定の時間を越えないこと、安全が確保されることが最重要課題である。否定 (NEG) を含む発話に限らず、リーダーが作業者に話しかけるのは作業指導時で、指示・命令の発話が多く観察されている。指示・命令の多くは、〈7〉のように特殊な状態や、〈8〉のように通常とは異なる状態を示すことによって、作業ミスや事故を回避する目的がある。リーダーの業務は、不良品なし、時間内作業、安全確保という課題が遂行できない事態を回避することだと言ってもよいだろう。リーダーは、〈7〉〈8〉のように、平叙文で正／通常とは異なる状／事態（下線）を示すという方法だけでなく、正／通常の状／事態を否定することでそれらを強調し、注意喚起を促したり、その場合の対応を説明したりしているのだと思われる。そして、いったんそのような事態が発生したら、その状態を正確に把握し、他の作業員へ知らせる必要がある。これによっても注意を促すことができ、正／通常とは異なる状／事態の回避につながるからである。

〈7〉 L: これ (クリップ)、プシーン、ピン、飛ぶ。ね。

U: あー。

L: だから、離してやってね。

〈8〉 L: あれ、またピンダウエル見といてやー、ピンダウエル。まとめて出てくるもので。

U: あー。

〈9〉 L: あの一、次の機種、あの一、クラッチが三A Cで四F A使いますんで、また、そこらへん間違えんように。この置いてある順番で使えば、使ってくればいいもので。

また、〈9〉のように正／通常とは異なる状／事態を否定することで、さらに強調し結果として注意喚起の機能となっている例もあった。このように、否定 (NEG) は強調や卓立を表しており、使用される頻度は低い、重要な活用形であると言える。

### 3. 5. まとめ

以上、製造業のライン作業に従事するリーダーの作業員との発話において、否定の意味で用いられた「ない」または否定の形態素「NEG」の使用について述べてきた。まとめると、以下のようになる。

- ・「ない」または「NEG」は、主に主節、従属節の述部で使用され、否定の対象となった品詞は、述部での使用が主である動詞が圧倒的に多い。
- ・名詞、または動詞に否定の形態素を付加しただけの形が最も多く使用されている。特に「ある」の否定「ない」が突出して使用頻度が高い。
- ・資料全体において「ない」または「NEG」が占める割合は大きくないが、「ない」または「NEG」は、正常、または通常とは異なる状態や事柄に関する発話で使用されており、使用される頻度は低くとも重要な活用形であると言える。

### 4. 日本語教育との関わりと今後の課題

今回の調査は、非常に限定された環境におけるケーススタディであるため、一般化することはできないが、実際に工場で指導をする立場にある日本語母語話者の使用を観察できたことの意義は大きいと思われる。日本語教育の現場では、学習者が日本語学習についてどのように考えているのか、どのようになりたいのかという学習者側の意識に注意を払う必要がある。また、習得の難易度も重要であるが、同時に学習者を取り巻く日本語使用状況にも注目しなければならないのではないだろうか。外国人労働者が日本語学校へ通うことは少なく、彼らにとって日本語学習は instrumental motivation による場合がほとんどであろう。このような学習者には、シラバス作成にあたり、実際に使われているという観点からの検討を欠いてはならないと思われる。

竹内 (2001) は、公民館における日本語講座の問題点として、学習が長続きしないという点を挙げている。浜松市 (1999) も同様の問題を抱えている。このような問題に対する即効薬があるわけではないが、学習者が置かれている日本語使用状況を考慮に入れた学習の機会を提供することによって、ある程度改善されると思われる。

今回は、話者であるリーダーの発話のみに注目したが、発話の相手である作業者の発話にも注目して、異同を調査したい。また、工場以外の環境においても資料を収集し、環境や話者による違いを明らかにしていきたい。

#### 【注】

- (1) テイルについては袴田 (2002) を、テ形については袴田 (2004) を参照されたい。
- (2) 会話相互作用のトランスクリプトをコンピューター・ファイルとして作成するフォーマットシステム。
- (3) Leonid Spector (Carnegie Mellon University) によって作成された言語分析プログラム。頻度計算、文字列検索、共起分析、MLU 計算などが自動分析できる。
- (4) 出現頻度計算を行うプログラム。
- (5) 本稿では、接続助詞のあるものだけを従属節とする。

#### 【参考文献】

- 畀田谷桂子 (2003) 「日・英応用磁気学実験系論文にみる能動文と直接受動文の使用比較—「実験方法」セクションを中心に—」『日本語教育』118号, 日本語教育学会, pp. 77-85
- 大嶋百合子・B. MacWhinney (1998) 『CHILDES Manual for Japanese』改訂版, 白井英俊・宮田 Susanne・中則大編集, The JCHAT Project
- 厚生労働省 (2003) 「外国人雇用状況報告結果 (平成15年6月1日現在)」  
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/11/h1128-1a.html>
- 佐藤勢紀子・仁科浩美 (1997) 「工学系学術論文にみる「と考えられる」の機能」『日本語教育』93号, 日本語教育学会, pp. 61-72
- 杉田くに子 (1997) 「上級日本語教育のための文章構造の分析—社会人文学系研究論文の序論—」『日本語教育』95号, 日本語教育学会, pp. 49-60
- 竹内比呂也 (2001) 「公民館活動にみる日本人社会とブラジル人社会の接点—浜松市の事例についての考察—」『ブラジル人と国際化する地域社会—居住・教育・医療』明石書店, pp. 210-227
- 袴田麻里 (2002) 「職場で使われる日本語—テ形、特に「～ている」に注目して—」『静岡大学留学生センター紀要』第2号, 静岡大学留学生センター, pp. 45-56
- 袴田麻里 (2004) 「工場内における日本語使用状況調査—「～て」の使用状況—」『2004年日本語教育国際研究大会予稿集発表2』日本語教育学会・他, pp. 273-278
- 浜松市地域日本語教育推進委員会 (1999) 『浜松市における日本語教育のあり方に関する報告書』浜松市地域日本語教育推進委員会
- 村岡貴子 (2001) 「農学系日本語論文における「結果および考察」の文体—文末表現と文型の分析から—」『日本語教育』108号, 日本語教育学会, pp. 89-98
- 村田年 (2003) 「文章と文型5—経済学論文における文型の使用頻度調査—」『日本語と日本語教育』第31号, 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター, pp. 1-28
- \_\_\_\_\_ (2004) 「論文の大段落と文型—物理学論文の場合—」『日本語と日本語教育』第32号, 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター, pp. 19-52
- Ellis, R. (1997) *Second Language Acquisition*: Oxford University Press.